

認知論的視点に基づく英語の Time-away 構文と
動詞・不変化詞構文の繋がりについて
**A Cognitive Account of the Relationship Between Time-away and
Verb-Particle Constructions in English**

本多 明子[†]
Akiko Honda

[†]至学館大学
Shigakkan University
honda@sgk.ac.jp

Abstract

This article presents the relationship between the time-away construction and the verb-particle construction in English from the cognitive viewpoint. We can divide verb-particle constructions in three types in terms of the position of the particle (VPC-A, VPC-B, and VPC-C). This paper shows that the time-away construction is motivated by VPC-A. It offers the key to an understanding to the reason why the meaning of the time-away construction vary according to the form.

Keywords — Time-away Construction, Verb-Particle Construction, Marked/Unmarked

1. はじめに

英語には、Time-away 構文と称される(1)のような構文が存在する。

- (1) a. Ana sang the morning away.
b. Tom drank the night away.

(1a)は「アナは午前中ずっと歌を歌って過ごした」という意味であり、(1b)は「トムは一晚中お酒を飲んで時間を無駄に過ごした」という意味である。(1)に見るように、当該構文は形式面において[NP V NP away]から成り、意味的には「(動詞によって表される) 行為をしながら時間を(無駄に)過ごす」という事態を記号化している。このことから分かるように、Time-away 構文が表している「時間を(無駄に)過ごす」という意味は当該構文を構成する各言語要素(NP, V, NP, away)の意味に還元することはできず、当該構文において、構成要素の意味の総和が構文全体の意味にはなら

ないのである。

Time-away 構文に限らず、このような文法構文全体の意味を構文の構成素(名詞、動詞、副詞、前置詞など)の意味に帰することができない現象(他にも、結果構文、使役移動構文、Way 構文等)に対して、認知言語学の立場から新たな考えを提唱したのが Goldberg (1995, 2006) である。Goldberg は、用法基盤モデル(usage-based theory)の一種である構文文法(Construction Grammar)理論に基づき、構文という伝統的な概念を文法における基本単位とする。構文文法論の枠組みでは、構文は各々独自の意味と形式から成り、言語は構文の集合であるとの考えに基づいている。

Time-away 構文について初めて研究を行ったのが Jackendoff (1997, 2002) である。Jackendoff は、Goldberg による構文文法の考えに立脚しつつ、1. Time-away 構文に生じる不変化詞の away は「継続」を意味すること、2. 結果構文とは別個に独立した構文であること、3. Time-away 構文は動詞・不変化詞構文から形式的な側面を継承していることを含め当該構文の諸特性を述べている。一方、拙論 (2000, 2003) では、Jackendoff の主張する上記 1 と 2 の点について、構文文法論の観点から、1. Time-away 構文に生じる不変化詞の away は「結果・消失」を意味すること、2. Time-away 構文は結果構文と構文的な繋がりがあることを示した。本論文では、特に 3 点目の動詞・不変化詞構文との関係につい

て、Time-away 構文は形式的な側面に加えて意味的な側面においても構文的な繋がりが見られることを提示する。

本論文の構成は次の通りである。まず 2 節において、Jackendoff と拙論を概観する。そしてその中で、両者ともに構文文法の枠組みでありながら、現象の解釈が異なる理由について言及する。3 節では、英語の動詞・不変化詞構文の構文的な特性について、構文文法理論の枠組みに有標性の概念を組み入れた拙論(2012)を概観する。そして、4 節において、Time-away 構文と動詞・不変化詞構文の構文的な繋がりについて提示する。5 節は纏めである。

2. 先行研究

本節では、Time-away 構文について Jackendoff (1997, 2002) と拙論(2000, 2003)での見解について、特に本論文と関わる点に焦点を置き概観する。

Jackendoff は Time-away 構文に生起する不変化詞の away を「継続」を意味する away であると分析している。一方、拙論では、当該 away は「結果」を意味する不変化詞であることを示した。

Jackendoff が Time-away 構文に生じる away を「継続」を意味する不変化詞として結論付けたのは次の理由による。まず、当該構文の away が「結果」と「継続」のどちらの意味であるのかについて、事態の完結性(telecity)を調べるテストでは十分な判定結果を得られない。なぜなら、当該構文は、「継続」を表す *for* 句によって表される時間表現と「結果」を表す *in* 句による時間表現の共起関係からは示すことができないからである (Lois and Clark danced two blissful hours away *for/*in a month (Jackendoff 1997: 540))。そこで、Jackendoff が注目したのが Time-away 構文が表す全体の意味である。前節で見たように、当該構文は「ある時をずっと～して過ごす」という行為の継続を意味していることから (Bill slept the afternoon away ⇐ Bill spent the afternoon sleeping (ibid.: 537))、当該構文の不変化詞 away

は「継続」との分析が妥当であるとしたのである。

一方、拙論では、Time-away 構文に生じる away を「結果」を意味する不変化詞と分析した。その理由は、次の三点の結果に基づく。第一に、「結果」を意味する away は目的語の前後の位置に生じることが可能であり、Time-away 構文の不変化詞もそれと同様の振る舞いを示す (尚、本論文では、便宜上、(2)、(3)、(4)において、「結果」を意味する away を Result(R)、「Time-away 構文」を(T)、「継続」を意味する away を Duration(D)と表記する。また、本論文において*マークはその形式が存在しないことを示す)。

- | | | |
|--------|-----------------------------|-----|
| (2) a. | kick away the dog | (R) |
| | a' kick the dog away | (R) |
| | b. sleep the afternoon away | (T) |
| | b' sleep away the afternoon | (T) |
| | c. kick away at the dog | (D) |
| | c' *kick at the dog away | (D) |
- (拙論 2000: 100)

第二に、Jackendoff 自身(1997: 540)も指摘しているように、entirely などの副詞との共起関係において Time-away 構文の away と「継続」を意味する away とは振る舞いの点で異なる。

- | | | |
|--------|---|-----|
| (3) a. | Sally kicked the dog entirely away. | (R) |
| | b. Sally waltzed the afternoon {entirely/
partly/half} away. | (T) |
| | c.* Sally waltzed {entirely/partly/half}
away. | (D) |
- (ibid.)

(3)に見るように、「継続」を表す away は entirely などの副詞と共起することはできない。一方、Time-away 構文の away はこのような副詞と共起可能であり、拙論で述べたように「結果」を表す away と同じ振る舞いを見せる。

第三に、事態の完結性について、It took ... を用いた結果によると、Time-away 構文の away は

「継続」ではなく「結果」の *away* と同じ振る舞いを示す。

- (4) a. It took two minutes for John to finally get to kick the dog away. (R)
 b. It took a month for Lois and Clark to finally get to dance two blissful hours away. (T)
 c. *It took a month for Lois and Clark to finally get to dance away. (D)
 (ibid.)

(4)に見るように、Time-away 構文は「結果」の *away* が生じる文と同じように完結的な事態を表している。

以上の事実から、拙論では Time-away 構文に生じる *away* を「結果」を意味する不変化詞であると結論づけた。この点を踏まえた上で、次に Time-away 構文と動詞・不変化詞構文の構文的な繋がりを提示する。その前に、次節において動詞・不変化詞構文の特性について拙論(2012)を概観する。

3. 動詞・不変化詞構文

英語の動詞・不変化詞構文(Verb-Particle Construction (VPC))に関して、拙論(2012)で明らかになったことは、概略以下の通りである。すなわち、当該構文は、形式的に二つのタイプを有し、一つは、結果に焦点を置く形式[NP V NP P] (Result-focused (RF) VPC)であり、もう一つは、行為に焦点を置く形式[NP V P NP] (Action-focused (AF) VPC)である(尚、ここでは、NP は Noun Phrase を、V は Verb を、P は Particle を省略して示している)。

- (5) a. [NP V NP P] (RF)
 b. [NP V P NP] (AF)

両者の違いは、完結性の観点、または、How

を用いた疑問表現の答えになり得るかどうか、という観点から確かめられる (e.g., *She ate a peach up in/*for three minutes. (RF); How did you dance? I danced my legs off. (AF)*)。さらに、不変化詞は、元来、結果の意味を表す(Visser, 1963)という点を踏まえると、有標性の観点から、[NP V NP P]の形式は無標、[NP V P NP]の形式は有標となり、意味の側面では、RFは無標、AFは有標となる。

当該構文は、不変化詞の生じる位置により、以下に示すように三タイプに分類できる。ここでは、便宜上、各タイプを VPC-A、VPC-B、VPC-C と記す。

- (6) VPC-A: [NP V NP P]/[NP V P NP]
 e.g. *walk one's headache off, ring the curtain down, blow the cobwebs away, etc.*
 VPC-B: [NP V NP P]/*[NP V P NP]
 e.g. *dance one's legs off, cry one's eyes out, work one's head off, etc.*
 VPC-C: *[NP V NP P]/[NP V P NP]
 e.g. *lay down one's arms, take up the challenges, let off steam, etc.*

構文文法論に有標性の観点を組み入れることにより、先行研究では十分に説明できなかった事例も含めて、当該三タイプを統一的に説明することが可能となった。VPC-A は、意味が無標(e.g. *She walked a headache off in/*for an hour; She walked off a headache in/*for an hour*)であるので、無標若しくは有標形式が可能である。それに対して、VPC-B は、有標の意味を無標形式で表すことができるので(e.g. *He sang his heart out for/*in an hour*)、有標形式は阻止(block)される(**He sang out his heart*)。一方、VPC-C は有標の意味を表すので(e.g. *They laid down their arms for/*in an hour*)、有標形式を第一に選べる(primarily select)。

以上の点を考慮に入れながら、次節では

Time-away 構文と動詞・不変化詞構文との構文的な繋がりについて見ていく。

4. Time-away 構文と動詞・不変化詞構文とのかかわり

先に述べたように、Time-away 構文に生起する不変化詞の away は完結性の観点からも結果を表し、且つ、動詞の前後の位置に置くことが可能であり、さらに、副詞との共起関係を見ても、「結果」を意味する away と同じような振る舞いを示す。このような Time-away 構文の特性を考えると、当該構文は、無標形式と有標形式を可能とする動詞・不変化詞構文の VPC-A と意味的にも形式的にも構文的な繋がりがあると考えられる。では、いったいどのような点で繋がりがあると言えるのか。

前節で見たように、動詞・不変化詞構文である VPC-A の特徴には、次の二点が挙げられる。

(7) VPC-A の特徴:

1. telicity の観点からみると、完結した事態を記号化している。
2. 不変化詞は、動詞に後置する名詞句の前後に生じることが可能である。

一方、Time-away 構文は次のような特徴を持つ。

(8) Time-away 構文の特徴:

1. telicity の観点からみると、完結した事態を記号化している。
2. 不変化詞は、動詞に後置する名詞句の前後に生じることが可能である。但し、不変化詞は away に、当該名詞句は時を表す名詞句に限定される。

このように意味的にも形式的にも Time-away 構文と VPC-A には類似点がある。さらに、構文文法理論における構文間の繋がりという観点においては、Time-away 構文は VPC-A からの拡張構文であると言える。なぜなら、VPC-A は、体感できる結果(変化)を記号化し得るのに対し、Time-away

構文で表される結果(変化)は、拙論(2000)でも述べたように、当該構文は「時間の経過」を表すという特徴を持つことから体感変化ではないからである。次の二つの文を比較してみよう。

- (9) a. Nancy sang her grief away.
- b. Nancy sang the night away.

(9a)が VPC-A で、(9b)が Time-away 構文である。この二つの例文の違いは、目的語の名詞句が her grief か the night かという点のみである。通常、悲しみのような感情は外からの刺激に反応して起こる心の変化であるので、体で感じるができる。それに対して、夜が過ぎてゆくという時間の経過は体感変化ではない。なぜなら、人は時間の経過を認識する感覚器官を持っていない。人が時間の経過をどのように認識しているのかについては、Lakoff (1990)が次のように述べている。人は、「TIME PASSING IS MOTION」という概念メタファーが働き、時の流れを実際の変化のように捉えている(cf. 拙論(2000))。Time-away 構文における不変化詞 away は「時の変化」、すなわち、「時の流れ」を表す記号である。Time-away 構文は、動詞・不変化詞構文 VPC-A の意味と形式を用いた比喩的な表現であり、我々の時の流れに対する認識の仕方を映し出しているのである。

以上、Time-away 構文は動詞・不変化詞構文の中でも VPC-A との間に構文的な繋がりがあつことを論じてきた。

さらに、Time-away 構文が VPC-A と構文的な関係があるとみなすことにより、説明できる点がある。それは、当該構文が二つの解釈を持ち得ることである。その二つの解釈とは、(10)に示す通りである。

- (10) a. 'spend [Time NP] V-ing'
- b. 'waste [Time NP] V-ing'

一つは、(10a)に示すように言語化されている時間を～しながら過ごすという解釈 ('spend [Time NP]

V-ing')である。そして、もう一つは、(10b)に示すように、表されている時間を～して無駄に過ごすという解釈('waste [Time NP] V-ing')である。具体的に次の二つの例を見てみよう。

- (11) a. He slept the afternoon away.
b. He slept away the afternoon.

(11a)と(11b)の違いは、不変化詞 *away* の位置である。(11a)では *away* は時を表す名詞句 *the afternoon* に後置している。一方、(11b)では *away* は動詞 *slept* の直後に位置している。Time-away 構文を VPC-A と関連構文であるとみなすならば、VPC-A と同様に、(11a)と(11b)の間には意味的な違いがあると考えられる。果たしてどうなのだろうか。予想としては、(11a)は無標形式であるので、結果に焦点があることから、行為に焦点を置く有標形式の(11b)に比べると、時間が過ぎ去ったという点に焦点が置かれ、「Time is money (時は金なり)」という諺にもあるように、一般に、時間とは貴重なものであると認識されていることから、「無駄に」の解釈がより強いと考えられる。英語母国語話者に調べると、予想通りの結果を得た。つまり、(11a)の方が無駄に時間を過ごしたという解釈が強いということである。(11a)は、眠るという行為によって、午後という貴重な時間が過ぎ去ってしまった点に焦点があり、結果として、その時間を無駄に過ごしたという意味が強くなる。一方、(11b)は、午後の時間ずっと眠って過ごしたという行為に焦点がある。

以上のことから、Time-away 構文は、VPC-A と意味的にも形式的にも関係があると言える。Time-away 構文における形式の違いは、意味の違いを反映しているのである。

5. おわりに

本論文では、認知意味論・構文文法論の観点から Time-away 構文は VPC-A と構文的な繋がりがあることを論じてきた。当該二つの構文は意味的にも形式的にも類似しており、この二つの構文を

関連構文と捉えることで、Time-away 構文の諸特性に加えて、解釈の面など意味的な特性を説明できることを示した。

謝辞

*本稿執筆にあたりまして、英語母国語話者のインフォーマントとして貴重な御意見を賜った Malcolm McLucas 先生に深く感謝いたします。さらに、有益な御助言、御意見を賜りました査読委員の先生方に心より感謝申し上げます。

参考文献

- [1] Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- [2] Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work – The Nature of Generalization in Language*, Oxford University Press, Oxford.
- [3] Honda Akiko (2012) "Particle Placement of Idiomatic Verb-Particle Constructions in English," *Papers from the Fourth International Spring Forum of the English Society of Japan (JELS 29)*, 222-227.
- [4] Jackendoff, Ray (1997) "Twistin the Night Away," *Language* 73, 534-559.
- [5] Jackendoff, Ray (2002) "English Particle Constructions, the Lexicon, and the Autonomy of Syntax," *Verb-Particle Explorations*, ed. by Dehe N., Jackendoff R., McIntyre A., and Urban S., 67-94, Mouton de Gruyter, Berlin.
- [6] Lakoff, George (1990) "The Invariance Hypothesis: Is Abstract Reason Based on Image Schemas?," *Cognitive Linguistics* 1, 39-74.
- [7] 宮田 (本多) 明子 (2000) 「構文間の継承関係について— Time-away 構文と結果構文は独立した構文か—」, *Papers from the National Conference of the English Linguistic Society*

of Japan (JELS 17), 96-105.

- [8] 宮田 (本多) 明子 (2003) 「英語における 3 つの構文間の継承関係 – Time-away 構文・結果構文・使役移動構文」『言語文化論集』 61: 199-210, 筑波大学現代語・現代文化学系.
- [9] Visser, Frederik Theodoor (1963) *An Historical Syntax of the English Language*, part I, E. J. Brill, Leiden.